



11月5日（木）、県央地区の高等学校の先生方を対象に、平成27年度第1回高等学校特別支援隊地域研修会が開催されました。6月の本連絡会で高等学校特別支援隊の事務局である県立栗田養護学校の呼び掛けに対して、県立秋田西高等学校が快く会場を提供していただき実現しました。

1 テーマ

「高等学校における特別支援教育の現状と対応」

2 内容

○実践発表「高校生学校生活サポート事業の取組」

県立秋田南高等学校 養護教諭 岸本 かおる先生



(1) 高校生学校生活サポート事業の概要

- ・平成24年度から学習サポーターが配置され、支援対象生徒の授業への支援及び観察、声掛けを行っている。（今年度、支援対象生徒は3名）

(2) 校内支援体制

- ①特別支援委員会（コーディネーター、学年主任、対象生徒の担任、保健・教育相談部主任、養護教諭、学習サポーター）
- ②校内小委員会（学年を中心とした関係職員、高等学校特別支援隊との情報交換）
- ・2つの校内委員会では、情報交換と具体的な対応について話し合い、学級担任の不安と負担を軽減することが目的である。

③生徒の実態把握の方法

- ・全学年→行動観察（担任、教科担任、養護教諭、学習サポーター等）
- ・1年生→中学校からの申し送り（入試、地生研等） 中学校からの聞き取り
入学決定後、校長から中学校への事前連絡、養護教諭から中学校へ電話で聞き取り
入学後、中学校学級担任等への問合せ

④専門家等の活用～高等学校特別支援隊の要請（月1回）、県立聾学校との連携（発音指導）

(3) 支援対象生徒の変容

①生徒A（自閉症・場面緘黙）

〈実態と支援〉

- ・学校では必要なとき以外はほとんど話をせず、筆談か小声で応答する。成績は上位である。
- ・大事な連絡事項は、本人だけでなく、保護者にも視覚支援を活用して伝えた。

〈変容〉

- ・筆談よりも言葉で返答することが増えた。
- ・野球の全校応援、センター試験等の初めての環境でもスムーズに行動ができた。
- ・卒業式の呼名の際にハッキリとした声で返事ができ、職員席で驚きと歓びの声が上がった。



②生徒B（中等度難聴）

〈実態と支援〉

- ・発音が不明瞭なため、聾学校に依頼して放課後に発声練習を取り入れている。（Bさんが入学した年に、聴覚障害のある生徒の理解と対応について校内研修を開催）
- ・分かりやすい授業を心掛けた。

例：英語～CDラジカセの位置を本人の近くに置く。テストのリスニングは別室で実施。

その他の教科～提示資料を大きく見やすくする。聞こえやすい場所で分かりやすく大きな声で話す。生徒の発言を教科担任が復唱する。

〈変容〉

- ・困ったとき友人に助けを求められることができるようになり、サポートすることが減った。
- ・補聴器を装着していても聞き取れないことが多い、分からなくてもすぐに「分からない」と言えない辛さがある等、教師の生徒理解が深まった。

(4) 成果と課題

- ・1年次に担任が本人や保護者と信頼関係を築くことが、その後の学校生活をスムーズに過ごす上で重要である。2年次以降は、周りの生徒の協力が大きいので学級編制の配慮が重要である。
- ・支援対象生徒について、学級担任だけが難儀しないように、できるだけ多くの教師が関わり、役割分担しながら全体で支援する雰囲気を作ることが大事である。
- ・家庭での声掛けや協力が大事になるので、保護者と協力関係を築くことを心掛けている。入学式前に保護者、本人と具体的な支援の方策を話し合うことが信頼を得る第一歩である。

○秋田県総合教育センター研究発表「高等学校における特別な支援を必要とする生徒のキャリア教育に関する研究」 秋田県総合教育センター 副主幹 伊藤 敏博先生



(1) 研究の背景

- ・知的な遅れはないが学習面、行動面で特別な教育的支援が必要な生徒が321人(1.2%)在籍している。(平成23年12月特別支援教育課)
- ・平成22年3月に卒業した県内の高卒者の3年以内離職率が全国平均を6.6ポイント上回る48%で、増加傾向にある。(厚生労働省の調査 平成26年7月3日秋田さきがけ新報に掲載)

(2) 特別支援教育の支援体制

- ・高等学校のコーディネーターは、養護教諭が指名されている割合が高い。
- ・校内委員会の形態は、単独で開催している学校が約8割、その他は保健関係の分掌会議と兼ねている学校が多い。
- ・支援対象生徒の「個別の支援計画」や「個別の指導計画」の作成率は16%程度である。

(3) 特別な支援を必要とする生徒のキャリア教育の現状と課題

- ・キャリア教育の内容で多いのは、「具体的な進路(就職先や進学先等)の選択や決定に関する指導や援助」、「就業体験(インターンシップ)」、「社会生活の決まりやマナー」である。
- ・課題として最も多かったのは、「保護者との連携」である。理由としては、本人や保護者の障害受容について学校と共通理解できていないことが挙げられる。
- ・インターンシップの実施状況については、実施学年は全て2年生、実施日数は3日間(66%)、5日間(16%)、実施時期は8割近くが7~8月の夏季休業中である。
- ・課題としては、①肯定的な自己理解に対する支援の充実 ②インターンシップの工夫 ③保護者との協力関係の構築が挙げられる。

(4) 研究のまとめ

- ・支援を必要としている生徒の支援内容や段階を3段階(一次支援:全体への支援 二次支援:個別の配慮 三次支援:個別の指導)に分けて指導することが望ましい。特に一次支援の充実が求められている。具体的には、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり、「ライフスキル講座」等の学校生活や社会生活全体を対象とした内容を充実させることである。また、一人一人の生徒の課題を教職員のチーム援助によって解決に向かう姿勢も重要である。



事務局ニュース

1 本校の行事に、秋田西高等学校、金足農業高等学校、五城目高等学校の生徒がボランティアとして活動しています。先月の学園祭では、秋田西高等学校の生徒がダンスを披露し、大いに盛り上げてくれました。これからも本校のサポーターとして活躍してくれることを期待しています。



若さ爆発！秋田西高生

2 10月20日(火)、五城目高等学校でボランティア養成講座を開催しました。受講した生徒からは、「障害は身近なものだと分かりました。私たちが理解を深め、支えることだと思いました。」「様々な人が笑顔で暮らせる社会にしたいと思いました。」「相手の気持ちを考える大切さを再確認できました。」「これからの自分の目標が見分かりました。」等の感想が寄せられました。今後、ボランティア体験を通して、実践的行動へとつなげてほしいと思います。

3 今年度2回目の「特別支援教育コーディネーター連絡会」を2月中旬に予定しています。後日、案内を送りますので、参加くださいますようお願いいたします。